

生文研メール

8号

平成19年12月21日

Ver. 1.2.2

生活文化研究所

〒700-8516

岡山市伊福町2-16-9

ハートランド清心女子大学

e-mail

ricch@post.ndsu.ac.jp

目次

日本人と海藻のかかわり (8)	
備前の名物「白藻」	今田節子 1
体験的生活文化史 昭和編 その八	新田義之 3
世之助の旅・芭蕉の旅 西鶴研究こぼれ話8	広嶋進 4
不思議な出会い (その八)	
宝玲文庫の琉球国使節行列絵巻	横山 學 6
新資料の紹介 小山家文書 その一	8
編集後記・お知らせ	

日本人と海藻のかかわり (8)

備前の名物「白藻」

今田節子

江戸時代から「備前の名物」といわれる海藻が

ある。全国の名物を記載した『毛吹草』(一六三三)や『本朝食鑑』(二六九五)、『大和本草』(一七〇九〜一七一五)にも紹介されている紅藻類シラモである(資料1)。「備前の白藻」、「備前堅浦白藻」、「伊予来島白藻」が有名で、生食が適し、水に浸して酢味噌で食べるとある。

江戸時代、住民にとって白藻はどのような海藻だったのだろうか。備前の地誌を紐解いてみると、『吉備温故必録』(寛文年間)には小津村、西片上村、胸上村において白藻が名品とあり、その後の『備前記』(一七〇四)や『東備群村誌』(天保頃)などの多くの地誌に度々記載がみられる。なかでも解説が詳しい『備陽記』(一七二七)には、白藻の産地の他に、形状は邑久郡小津村・奥浦村のものは太く柔らかで、採取は五月から八月にかけて行われ、干して売るとある(資料2)。備前の白藻とは、現在の瀬戸内市牛窓町小津・奥浦、備前市西片上、玉野市胸上で採取される白藻

を指し、特に牛窓町の錦海湾(現在の錦海湾塩田跡地)には、良質な白藻が繁茂していたことになる。また、これらの地誌には、白藻の産地とされた地域は田畑と漁で生活が営まれていたと記載されている。すなわち、農業偏重型の半農半漁の生業のなかで、白藻は換金対象として位置づけられ、生計の一助となっていたことが窺える。

さらに『長浜村古記録』には「慶長年中、紫羅藻御用仰せ付けられ、五百拾枚、差出し江戸送り相成云々」とあり、徳川幕府の名によって小津の白藻を献上した事実を伝えるものとされている。これも、小津や奥浦の白藻がいかに良品で重視されていたかを物語る資料である。

大正後期から昭和初期の伝統食に関する聴き取り調査でも、牛窓町の錦海湾沿岸地域では白藻採取が盛んで、地域独自の食習慣を伝承してきた様子を窺い知ることができる。その概略を紹介すると次のようである。

白藻は泥質で潮の流れが悪い海域に自生する特徴がある。湾が深く入り込み、海水の通りが悪く、海底が泥質である錦海湾は、白藻の自生に最適な環境であった。梅雨明けから真夏にかけての最盛期には、三十隻もの船が出て、陸から見ると海が

黒く見えるほどであったという。船が沈むほど欲張って採り過ぎ船が進まず、炎天下で満潮を待つのはつらいものであったという笑い話も伝えられている。採取された白藻は堤防や庭先に拡げて干し、出荷用は木枠に入れて長方形に干し、豊んで見栄えをよくして出荷された。昭和五、六年頃の話であるが、盆前になると林野や吉井町などの県中部あたりまで、自転車ですり歩いた者もいたという。また、前述の江戸送りの五一〇枚の白藻も、このような板状のものであったと推測される。

陸上交通や運搬技術が未発達であった昭和一〇年頃、果菜類の栽培が盛んであった錦海湾沿岸地域では、漁家だけでなく農家でも運搬用の小舟を持っていた。農家でもその船を利用して毎年のように白藻採取が行われていた。すなわち、年間の栽培計画のなかに白藻採取も組み込まれ、年中行事のように行われてきたのである。白藻も果菜類と同様に、地域住民の生計に大きく関与していたといえよう。

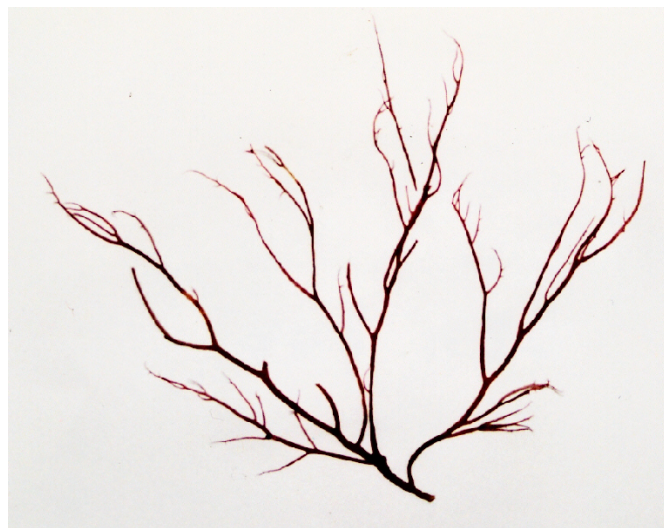
各家庭では乾燥白藻を保存し、主に非日常食として利用されてきた。乾燥白藻を叩いてゴミを落とし、水洗いしながらよく水戻しし、湯通ししたものを、油揚げやキュウリと共に三杯酢や酢味噌で

和える酢の物や和え物が代表的な料理である。シヤリシヤリとした歯ごたえがおいしい素朴な料理である。また、昔から薬効も認められており、粥やおじやに白藻を入れ、ドロドロに溶けたものを食べると腹薬になるといわれてきた。

白藻は盆や法事、葬式、御大師講、彼岸などの仏事の供物や精進料理として欠かせないものであった。白藻はイギリス同様に「仏様のご馳走」といわれ、白藻がなければ内部の仕事（葬式を組で手伝い、死者との最後の食事である立飯の料理を手作りする習慣）にならないといわれたほどである。そして、牛窓町内のある家庭に残されている記録『御先祖祭祀記録』や『祭式・法要諸控帳』等にも、明治初期から白藻が購入され供物として使用されたことが記載されている。仏事の白藻は、明治・大正・昭和と引き継がれてきた食習慣である。

しかしながら、昭和三十二年の錦海湾干拓により、白藻の自生地は失われ、これを期に白藻の食習慣は衰退の一途を辿った。現在では昔を懐かしむ食習慣となってしまうが、牛窓町周辺の地域では、盆の季節になると、少量ながらも乾燥白藻が店頭に並ぶ。私自身も、これを購入し、白藻の酢の物を作り、盆の供物の一品とする一人である。

【資料1】備前の白藻しらも



【資料2】『備陽記』中の白藻記事。

一白藻
和氣郡片上村城邊。邑久郡小津村奥浦村牛窓
村見島郡杓上村ノ城邊ニテ毎歲五月ヨリ八月迄
トリチヲ採取ルナリ成ハ風味宜一日ノ外モタス其内
邑久郡小津奥浦ノ城邊ニテ取ル白藻ハトリ
ヤハラカ也是ヲ名物トス

【主な参考文献】(1) 新村出校閲・竹内若校訂

- 『毛吹草』(一六四五)、岩波書店、一九四三。
 (2) 人見必大著、島田勇雄訳注『本朝食鑑』第一卷(二六九五)、平凡社、一九七六。(3) 貝原益軒『大和本草』卷之八(二七〇九)一七二五、益軒会編『益軒全集』卷之六、益軒全集刊行部、一九一一。(4) 吉備群書集成刊行会編『吉備温故必録』(寛文年間)、『吉備群書集成』七卷、歴史図書社、一九七〇。(5) 石丸定良編『備前記』七卷(二七〇四)、岡山市中央図書館蔵。(6) 新編吉備業書刊行会編『東備郡村誌』(天保頃)、『新編吉備業書』第二卷、歴史図書社、一九七六。(7) 石丸定良編『備陽記』(二七二七)、日本文教出版社、一九六五。(8) 盛永賭俊太郎、安田健編『備前国備中国之内領内産物帳』(二七三六)、『諸国産物帳集成』第七卷、科学書院、一九八七。(9) 小林壽太編『長浜村古記録』、『長浜村誌』、長浜村役場、一九二五。(10) 今田節子、『日本食生活文化調査研究報告集』八、三二〜四六頁、日本食生活文化財団、一九九一。

体験的生活文化史 昭和編 その八

新田義之

終戦の年(昭和二十年)に小学校六年生であつ

た私は、病気のため一年遅れて、昭和二十二年四月に発足した新制中学に最初の一年生として入学し、二十五年に新制津幡高等学校最初の一年生となり、二十八年三月に卒業した。三年間の高校生活は日常の生活的物質的困窮とは対照的に、無制限に自由で明るく、成績の良し悪しや家庭環境の違いなどをまったく意識しない健康な人間関係を、学級や学年の壁を超えて楽しむことができた。つまり終戦直後に開始された性急な学制改革は、どう見ても万事に無理が多かつたにもかかわらず、この時期に中等普通教育を受けた私たちに、少なくとも自己責任において自由に生きる幸福を与えてくれたことだけは確かだった。

三年生になった年の半ばごろ、卒業後の進路についての希望を申告することが求められた。私には就職するつもりはなかつたが、受験のこともまだ具体的に考えていなかったため、先生が、「君の兄さんは東北大だったな、君もそうしたらいいだろう」というままに、一応はそうしておいた。旧制の農学校と女学校とが合併してできた津幡高校はこれまでに二度卒業生を出しただけで、先生たちには当然ながら進学指導の経験などなかつたが、前年度の国立大学進学希望者のほとんどが新

制金沢大学か富山大学に収まり、私立大学を受験した生徒も、全員が六大学を含めて各自の希望通りのところに合格していたので、進学率などよくよすることもなく、生徒の好きにまかせておいてよかつたのだろう。私も親しかった一級上の泉君が京都大学を受けて失敗し自殺してしまつたとき、その事件が先生と生徒に与えたショックは大きかつたが、そうかと言ってそれを進路指導上の問題に結び付けて考える者はいなかつた。当時この学校では、早く社会に出て自分の可能性を試したいと望んでいる生徒の方が主流だったので、進学率を上げることが至上命令だとする風潮が生まれる以前の、むしろ自然で健康な教育感覚が生きていたからである。

私の兄は四高から旧制の東北大学に進み、その頃は大学院特別研究生となつていた。専門は哲学であつたから、何れにせよ文学部に行くことしか念頭になかつた私には、もし自分が東北大に入る事になれば当然ながら兄の影響下に入ることを意味したので、いかに敬愛する兄とは言え、それも少し鬱陶しい気がした。そこで三学期になつて志望を変更し、東京大学を受験することに決めた。受験に必要な八科目は一応教科目の余裕をもつて

選択学習してあったが、不得意な数学だけは改めて基本からやり直さなければ合格は望めなかった。最低一年間の浪人生活は覚悟した。そして事実その通り、昭和二十八年四月から十二月までは東京で予備校に通い、一月二月は故郷の家で一応の総仕上げして、三月初旬に三日間続けて行われた入学試験に合格し、東京大学教養学部文科二類（現在の文科三類）の学生となった。

浪人をしていた時期は初めての体験ばかりで、それだけに今でも思い出すことが多い。私の東京生活は江東区深川の木場という地区から始まったのだが、ここは全国から材木が集まってくるところで、町中にめぐらされた水路の上を筏に組まれた丸太が常に流れている場所であった。奇妙な縁で私は一本の水路に沿った狭い土地に、小さな掘っ立て小屋を建てて自炊生活をするようになった。この土地は高校時代の友人河合登君の両親の所有で、子供たちより一足先に疎開先から帰った彼の両親の家もそこにあった。河合君も間もなくこの親元に帰ってきた。彼は商船大学を受験するつもりだった。

当時この辺りでは、水からあげた丸太を木材置場に運んだり、売れた材木を注文主に届けたりす

るには、まだ荷馬車が多く使われていた。あたりは材木置場やその番屋、倉庫などばかりで、間にぼつぼつと小さな人家が散らばっていて、たまにすし大きな建物があれば、それは材木問屋の家だと思つて間違ひなかった。電車通りに出れば魚屋や八百屋などもないわけではなかったが、このあたり一帯が終戦の年の三月の深川大空襲で焼け野原となったので、生き残った住民の生活が楽になるにはまだ道が遠いと思われた。自家風呂を持つ家など非常に少なく、銭湯は毎晩大いに賑わつたが、男風呂の常連はほとんどが労働者で、背中に彫られた俱利伽羅紋かりがらもんも珍しくなく、明らかに性病持ちだとわかるような者もいた。閉口したのは、私の住む掘っ立て小屋の対岸の材木問屋が、毎晩暗くなると一日の排泄物をまとめて水路に放出することで、ゆつたり流れる掘割の水が汚物を運び去るまでにはそれなりの時間がかかった。臭気が消えるまで、窓を閉めてひたすら待つうちに、やがて月が出る頃には臭気もおさまるのだが、都会の生活には上水道ばかりでなく、下水道の完備も不可欠だということが身に沁みて分かった。

一番近い都電の停留場は木場三丁目といい、毎

日私はそこから乗車して、神田駿河台の予備校に通っていたが、その電車は須崎から門前仲町、深川不動、永代橋、日本橋茅場町などを経て神田保町に到り、さらに早稲田までゆく恐ろしく長い路線だった。私は駿河台下で降りて学校に行き。帰りは神田の古書店街などで遊んでゆくことも多かった。

夏を過ぎるころに高校時代の友人宮本君が、やはり東大を受験する決心をして上京してきて、私のすむ掘っ立て小屋と一緒に住むことになった。しばらくすると彼は、自炊では勉強する時間が惜しいから、ここを引き払って下宿しようと言い出し私も同意して、掘っ立て小屋を河合君の父親に買い取ってもらつて、早稲田大学前の下宿に移った。さまざまな体験をした一年であったが、その間に兄が自分の奨学金からかなりの部分を割いて援助してくれたことを、私は今なお感謝している。河合君は次の年、トラックの荷台から崩れ落ちた材木の下敷きとなり、アルバイト中に亡くなった。宮本君も受験に失敗し、数年後に病没した。

世之助の旅・芭蕉の旅

西鶴研究ごぼれ話

8

広嶋 進

古典が読まれなくなつたと言われながらも、『おくの細道』の人気は絶大で、どこの本屋さんに行っても、入門書などが必ず置いてある。その『ほそ道』の旅に松尾芭蕉は、元禄二年（一六八九）江戸深川から出発した。松島（宮城県）―象潟（秋田県）を訪れることがこの旅の目的のひとつであった。

一方、『好色二代男』の主人公の世之介も、父親に勘当されて漂白の旅に出るが、こちらもやはり象潟―松島を旅している。『二代男』は一六八二年の刊行で、『ほそ道』の旅より、七年も早い。しかし、俳聖芭蕉が色好みの世之介の跡を追跡していったとは、まず考えられない。

では、世之介と芭蕉の行き先が同じであるのは、なぜか？これは、当時流行していた中世の漂白歌人西行の足跡を、両者がともに追いかけたためである。西山松之助氏は、本学で行った講演で「旅」を次のように定義している。

「旅とは、日常性から自己を引き放し、非日常の生活空間に次々と自己を置き換えて、様々な出会いを感動しつづつ行く行動」（旅の文化史『生活文化研究所年報』3、平成元年十一月）

「旅一般」に対する、包括的で過不足のない定

義である。しかし古典文学における「旅」の定義は異なる。日本の古典文芸、特に和歌・連歌・謡曲・俳諧では、「旅」の「本意」伝統的に形成された美的本質」はどのように捉えられているかという、それは、

「都を下り、田舎へ行くこと。そして遠く都を思いやること」

である。たとえば、俳論書『三冊子』（一七〇二年成立）には、次のようにある。

「旅体の句は、たとひ田舎にてすとも、心を都にして、逢坂を越え、淀の川舟に乗る心持ち、都の便り求むる心など、本意とすべし」

現代語に訳してみよう。

「旅の句を作る場合は、たとえその句を田舎で作る時でも、都で作っている気分となつて、逢坂山を越え、淀の川舟に乗って作る気分になる、あるいはすでに都を離れていて、都への便りを求める心持ちで作る、などを旅の句の本意とすべきである」

言い換えると、地方で作る場合でも、心は都人の気持ちで詠むべきであるし、また「都を思いやる」心持ちで詠むべきであるということになる。和歌・連歌・俳諧における「旅らしい旅」と

は、あくまでも「都から鄙へ下ること、そして遙かに京を思うこと」にある。

右の『三冊子』は、実は連歌論書『連歌至宝抄』（紹巴、一五八六年成立）の引用である。もとの『至宝抄』には、続けて次のようにある。

「海に漕ぎ出る折節は都の山を跡にかへりみて懐かしく、昨日今日かの旅ながら月日をも送る様におぼえ、野路、山路の旅寝に古郷を恋ひ忍び、草の枕の夢の中にも去し方の事のみ見え侍り、うち覚めぬれば、松風、浦波の音を恨み、人やりならぬ道ながら遙々と来ぬる事を悔やみ、帰るさにはすがたもやせつかれ麻のさ衣もしほればはてたる様に仕りならはし候」

「古郷」とは、あとに残してきた我が家のこと、この場合は「都」をさす。「旅の本意」が具体的に述べてあるが、いずれも「都」を振り返り、懐かしみ、「旅」の身の辛さを「恨み」「悔や」むように詠めと教えている。すなわち、「都」を遠ざかり、旅寝をする苦しさ、辛さを詠むことを「旅の本意」と捉えている。ここには、「非日常の空間」と触れあうことによる解放感やロマンといったものはない。「旅」は辛く、厳しいものとし

て認識され、決して楽しいものとはされていない。十四世紀と十五世紀から、紀行文の例を挙げてみよう。

「これなん阿武隈川なりけり。都にて遠く聞きわたりし所の名なれば、限りなく遠く来にけるほども思ひしらる」(宗久『都のつと』一三六七年成立)

「名をとひ侍れば、中川といふに、都のおもかげいとごうかびて、なぐさむ方もやと覚えて、此川をわたるに」(宗祇『白河紀行』一四六八年頃成立か)

宗久も宗祇も、「都」で聞いたことや「都のおもかげ」とともに、「阿武隈川」「中川」という「名」にまず反応し、その感慨を綴っている。

芭蕉の態度もこの伝統を踏まえたものであった。「白河の関にかゝりて旅心定まりぬ、「いかで都へ」とたより求めしもことわりなり」『ほそ道』白河の段)

『ほそ道』の旅で芭蕉がしばしば、旅の辛さをもたらすのは「旅」の「本意」をなぞったものである。

「長途の苦しみ、身心疲れ、かつは、風景に魂うばわれ、懐旧にはらわたを断ちて」『ほそ

道』須賀川の段)

さらに『一代男』の世之介の行方も、中世の「旅」の定型を踏まえている。新潟の寺泊の遊廓に行つて、世之介は思う。

「屏風の絵を 見るに都なつかしくおもふうちに、亭主膳をすゑける。」

「(女郎が舟ばたままで送ってくれたことが) 京(島原)にて出口まで送らるる心地ぞかし」(巻三の五「集礼は五刃の外」)

世之介は田舎に行つても、京のことが頭を離れず、何を見ても、京都との対比で感慨にふけっている。

俳諧の付け合い語(連想語)をまとめた『俳諧類船集』(二六七六年刊)には、「旅寝の月」の連想語として「都を思ふ」が記載されている。

芭蕉も世之介も「都」との対照で行く先々の景物を見ている。求道者芭蕉も放蕩児世之介も、都のことを思い出しつつ、漂泊の旅をしたのであった。この点が、非日常性との出会いによって普段の自己を解放する、現代の「旅行」との大きな相違点である。

不思議な出会い(その八)

宝玲文庫の琉球国使節行列絵巻

横山 學

先日、偶然に手にした沖縄の新聞(『沖縄タイムス』十一月十五日)で、「江戸上り」絵巻が沖縄で修復されることを知りました。これは、ハワイ大学図書館の「坂巻・ホーレーコレクション」に所蔵されている「琉球使者金武王子出仕之行列」一巻で、寛文十一年の琉球国恩謝使の行列姿を描いたものです。琉球では江戸や薩摩・大坂への旅立ちを「上り」と称しました。この絵巻物はフランク・ホーレーが、戦後に古書籍商反町弘文荘から購入したことが判っています。ホーレーのコレクションには「江戸上り」の絵巻物が他にもあります。「宝永七年寅十一月琉球中山王両使者登城行列」二巻で、これは来年(平成二十年)春に、千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博物館の第三室(近世部門)のリニューアル展示に披露されることになっています。

物語絵巻や宗教的世界を表す縁起絵巻。書物のひとつの形式としての巻物。出来事の記録のため。芸事の所作を伝授するため。絵巻物の描かれる目的は様々です。琉球国使節の渡来を描いた「江戸上り」絵巻は、後世に行列の順序や構えなどの様子を伝えるために作られました。浮世絵や絵巻物

に描かれた図像には、現代の写真のような正確さからは程遠いのですが、今日とは異なる「省略されていない描写」の「正確さ」があります。描かれた着物の紋様や質感、鬘や簪、背景の家屋や諸道具など、改めて「正確さ」とは何かについて考えさせられます。絵巻物を見ると、当時の人びとの関心がどこにあったか、何を記録として留めようとしたかがわかります。

前述の絵巻物は、どちらも琉球国使節の様子を具体的に描いたものですが、寛文十一年（一六七二）と宝永七年（二七一〇）では、年度による違いとは別の異なりが見られます。まず前者では「出仕之行列」となっている表題が、後者では「登城行列」となっています。使者の行列順序にも異なりがあります。先導する薩摩藩士も、後者では馬上の家老・留守居・側目附が描かれています。前者にはありません。人数においても差があり、後者の方が増えています。使者の掲げる旗も、前者では「龍旗」「寅旗」の一对ですが、後者では「寅旗」のみが二旗です。使者の衣裳にも違いがあります。前者ではいわゆる「琉球衣裳」ですが、後者はその琉球衣裳の上から緋色の内掛けを羽織っています。そして、王子（正使）の天蓋付

き「乗輿」の形状も、背もたれの背後が塞がれたものから、素通しのものに替わっています。使者名も、前者では漢字やカタカナで墨書された小紙片が人物の頭上に貼り付けられ、漢字が確定できずに琉球言葉をそのまま表記したと思われるものもあります。後者では使者名も書き込まれていません。

絵巻物に描かれたこれらの違いを検討することが、幕府にとつての琉球国の位置づけを考えるうえで、ひとつの手掛かりとなりました。正徳元年（二七一二）に迎えた朝鮮通信使の処遇には、朝鮮国に対して幕府の「国体」を明確にするという意味があり、琉球国の扱いにも同様の意味づけがありました。宝永の使節渡来においては、琉球国王からの書簡の書体や書式を改めさせ、使者の役目を明確に定め、異国風を強調するように琉球国に強く求めたのです。朝鮮国は「龍」旗、琉球国は「寅」旗と旗の使用も区別しました。使者の装束を派手にして市中や街道の人びとの目を引き、見やすくするために正使の「乗輿」の形を変え、先導・同行する薩摩藩士もはつきりと描かせたのです。前者は、琉球国使節の行列の姿を留めるために描かれ、後に使者の名前を貼り足したもので

す。後者には、改められた琉球国使節行列の仔細を詳しく描写し、後世に伝えるという意味があったのです。宝永七年のものとしては、後者の他に二点あります。酷似した描写ながら琉球楽器の部分のみ省かれた国立公文書館内閣文庫本、そしてこれらの原本と推測される、狩野春湖の手になる大英博物館本です。残念ながら、大英博物館本は現在のところ断片化されたままの状態です。

フランク・ホーレーの遺した琉球コレクションは、坂巻駿三（当時のハワイ大学夏期大学学長）の尽力でハワイ大学に移り、「坂巻・ホーレーコレクション」となりました。昭和三十六年（一九六二）のことです。

琉球文化が注目され、「江戸上り」や琉球国使節の渡来の意味が問われつつある今日、このような貴重史料の修復作業や歴史民俗博物館での記念展示が進められていることは、長く琉球・沖縄の研究に関わってきたものにとつて喜ばしいことです。一方で、沖縄の本土復帰という近現代の大きな節目から、長い時間が経過したという思いをしています。

【新資料の紹介 小出家文書 その一】

先日の東京古典会入札市で「備前国御野郡鹿田村小出家文書」を落札しました。かねてより、岡山に関わる現物の資料に触れながら、歴史資料の大切さと生活の歴史を学生に伝えたいと考えておりましたので、またとない好機と思ひ購入を決めました。届いたときは中型のダンボール箱で二箱に詰まっております。書店の説明には「宝暦から明治期にかけての約八十冊、一枚文書約千五百点」とありましたが、実際には昭和戦前期までのものも含まれています。全くの未整理状態で、紐や紙縫りで縛られた書類の束が、旧蔵家に保管されていたそのままの形で届きました。文書全体の数量詳細は未だ不明です。内容は岡山市内の旧家「小出家」のいわゆる「家文書」で、多くは証文や年貢納帳などがありますが、当時の近隣関係や生活の様子を偲ぶことの出来る様々な雑文書が含まれています。明治新政府が生まれ、行政が藩から県に移行する時期の書類も多数含まれており、貴重です。古文書の授業を受講している学生を指導しながら、仮目録を準備しております。

当面は、取り扱いの容易な、束になった書類や冊子類を重点的に選んで取りだし、表書きと形状

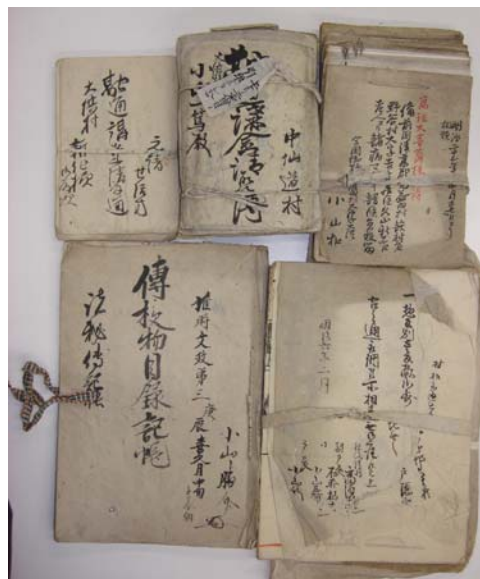
の記録を作成しています。全体の目録を完成させるまでには、かなりの期間を要とされます。この場を借りまして、資料の概要・特徴などを、随時ご紹介して参ります。順序不同。

- (1) 習字手本(往来物・写本) 「備前往来」「商売往来」「往来物品々留」
- (2) 誕生資料関係文書 「銘名書」「臍緒・初髪」
- (3) 小出家過去帳
- (4) 法事関係文書
- (5) 茶会記
- (6) 家相文書 屋敷見取り図・家相占い図・家相伺い書(当主の問いかけに対して、返答が朱書で記されている)
- (7) 還暦祝い関係文書 当主の母の還暦を祝うために近在の隣家から寄せられた金品・人名の記録とその返礼記録。
- (8) 近所火事見舞文書 近隣で発生した火事に際して近在の隣家から寄せられた見舞いの目録とその返礼記録、返礼品に添付した「刷り札(名刺)」の束。
- (9) 地図 「岡山県管下備前国御野郡京殿村絵図」(明治八年地所御改正二付西市邨江合併成ル後西市邨郡也)

(10) 国境調査報告書 城下の瓦町から備前国の国境までの里程を実測して報告している。

(11) 国勢調査申告書 第一回・第二回調査書類

【備前国御野郡鹿田村小出家文書】(一部)



【編集後記】

生活文化講演会の演題一覧・『生活文化研究所年報』既刊目次・「生文研メール」の全文をWE Bでご覧になれます。

http://www.ndsu.ac.jp/1000_guid/1700_insr/1730_la02

[/1730_la02_org01.html](http://1730_la02_org01.html)